漢字は心の珠を磨く道具

幼児開発（幼児開発協会機関誌）

『井深大連続対談』より

かれこれ十年にわたる長い知己であるが、二人だけでじっくり話し合う機会はあまりなかった。お互いの考え方をよく理解しあっているだけに、対談はスムーズに……しかし、時折あたらしい発見、同感などを織りまぜて、進行した。

三歳ぐらいからが適当

井深　覚える、覚えないということ以前に、それが身につくことになるか、ならないか、という問題があるわけですね。

石井　そうなんです。ですから、明治以来の、「仮名を学び終えてから漢字へ」というやり方は、絶対に変えなきゃいけない、というのが、それ以後の私の主張の、一番重要なポイントになってきたわけなんです。私の教えた……初めから漢字で覚えた子供たちは、“学校”という言葉は、漢字で書かなきゃならないものだと思っています。だから、それが書けないからと言って、“がっこう”とは書きません。調べるか、教わるかして、必ず“学校”と書きます。だから、必ず書けるようになります。ところが、仮名から先に習った子供は、仮名が身についてしまっていますから……。

井深　とにかくイージーに書きたくなる、おっくうになるんですよね。

石井　ええ、おっくうになるんです。ですから、書けるのに書かない。書かないから、書く能力は育たないどころか、衰えていく。これなんですよ、明治以来の漢字教育の問題点は。

井深　うん、うん。重要なポイントですね。

石井　そのことを、私は、昭和二十八年からの三年間の実験と、三十一年からの二年間の実験によって、確認したわけです。それをまとめたのが、“私の漢字教室（黎明書房発行）”という本です。これは三十六年に出しました。しかし、これが刊行されても、世の中に広く実施させるような影響力はありませんでした。たまたま、ある教育委員会の委員長がこの本を読んで共鳴し、同じく共鳴した校長に奨めて、学校職員が一丸となって実践した例があります。それは、新潟県の亀田東小学校という学校です。これは、五年間、学校を挙げてこの教育を実践し、すばらしい成績を上げてくれました。この学校は、その後間もなく廃校になり、今はありません。

井深　ほう……それは惜しいですね。

石井　次に、熱海市立桃山小学校。これは熱海市の教育長が支持してくれまして、校長が熱心にこの教育を推進してくれました。それから、富士市立須津小学校。これも三代にわたる校長がいずれも熱心にこの教育を推進してくれました。現在は、弘前市立前沢小学校があるだけです。校長の花田先生が熱心で、実践されて七年めになります。公立の学校では、三十六年以降十五年にもなるのに、この四校だけしかありません。

井深　その間、文部省の態度とか、一般の教育界の受けとめ方というのは、どうだったんですか。

石井　いやもうひどいもので、冷淡などというものを通り越して、大変な迫害を受けました。また、この教育を実践したということで、大変な迫害を受けた先生も何人かいらっしゃいます……。思えば、私も随分いやな目にあいました。

井深　そうですか。例えば？

石井　私より年下の女の先生を学年主任にして、その下におくなど……。また、漢字教育の発表会をしようと思っても反対する。強いてやろうとすると、他の教師に協力させないようにして妨害する。それで、昭和四十二年三月、辞表を出した上で、最後の公開授業を、学年末休業中に行いました。

井深　ああ、そうですか。

石井　父母たちは、十四年間、いつでも私を支持してくれました。校長が何と言おうと、誰が何と非難しようと、強く支持してくれました。それが何よりの支えになりました。それで、私も、十四年間、小学校でこの実験的な指導を続けて来られたのだと思います。最後の公開授業の時も、先生は一人も手伝いに来てくれませんでしたが、父母たちが、会場の設営から受付け、案内の仕事まで、総出で手伝ってくれまして、大々的な発表会になりました。

井深　幼児開発協会を作ったのが、そのころだなあ。

石井　ああ、そうでしたね。昭和四十二年三月、小学校をやめて、大東文化大学の講師になり、この教育の普及活動に専念しようとしている時に、幼児開発の動きがあって、まあ、やらせていただくようになったわけです。

井深　幼稚園で、先生のメソードを取り上げたところはありませんでしたか。

石井　それが、その年の十二月、大阪の小路幼稚園の井上園長から電話が掛りまして、「私は先生の著書を読んだが、ぜひお目にかかりたい」と言うんです。私が「いつでも会います」と答えますと、「では、これからすぐ参ります」って言うんですね。私は驚きました。

「おや東京にいらっしゃっているんですか」と言いますと、「いえ。今はまだ大阪の自宅ですが、お会いできるなら、すぐに参ります」って……。

井深　ハハハハ。へえーえ。

石井　電話があってから、三時間ほどで、ほんとにやって来ました。タクシー、飛行機、タクシーと乗り継いでやって来たのです。一時間ばかり話し合った後、井上先生曰く、「先生のやってることは、小学校じゃ広まりません。幼稚園です。私にお任せ下さい」って……。

井深　うん、うん。なかなかこれは……。

石井　実を言いますと、私は小学校に広めることばかり考えていて、幼稚園のことは少しも考えていなかったんです。

井深　息子さんの御経験からしても、それはちょっと手抜かりでしたな（笑い）。

石井　ええ。今から考えると、当然、それ考えなくちゃならないはずだったのに。でも幼稚園に普及させるということは全く考えていなかったのです。どこまでも、小学校の教育の改革ということで。

井深　公立学校の指導主事だったからでしょう。

石井　やっぱり垂直思考なんですね。水平思考はなかなか……、ハハハハ。井上園長に言われてみますと、小学校で一番よく漢字を覚えるのが一年生なら、幼稚園だって五、六年生以上に覚えるはずだって、すぐ思いました。自分の子供の経験があっても、それには重きを置いていなかったんですね。

井深　偶発したことだ、という風にね。

石井　ええ、そういう風にとっていましたね。もっと沢山の実例を持っていたら、気が付いたと思いますけど。……ところで、井上先生を初め、いくつかの幼稚園で実際にやってみますと、この年は年長児（五歳）にやったのですが、小学校の一年生よりもむしろよく覚えるのではないか、という期待以上の好結果が出ました。それで、その翌年に、これを年少児（四歳）におろしてみたんです。すると、「年少児は年長児に決して劣らない」という結果が出ました。

井深　そうですか。

石井　それで、その次の年には“三歳児”に……という具合に、年ごとに下の年齢におりていき、結局、二歳児を預っている保育園では、二歳児でも大丈夫……。

井深　入れる、ということですね。

石井　はい。

井深　入れる、入れない、というのが問題ですよね。

石井　今では、実験的には、生後八か月から漢字を覚えることができる、ということがわかりました。

井深　ほう……八か月で？

石井　これは、又吉さんという、沖縄で私のメソードを熱心に実践してくれている方ですが、この方が自分のお子さんにやってみて、八か月から半年の間に、漢字を二百字覚えた……。

井深　二百字！

石井　その上、英語の単語を二百語……。みんな読めるようになりました。そういう実験をやってくれました。最初のうちは、手ごたえもないようですが、いったん呑み込むようになると、あとはぐんぐん覚えるようですね。

井深　筋道さえつけば、覚えるんだなあ。

石井　この間、私、大阪のある保育園に講演に行きまして、その翌日、「やっぱり先生のおっしゃる通りでした」と園長さんから言われました。というのは、お孫さんに小学校二年生と四歳の子供がいて、同じ漢字を一緒に教えてやって翌朝試してみたところ、全部覚えて読めたのは四歳の子供で、二年生の子供は忘れてしまっていたというのです。四歳と七歳とではそれだけ違うんです。今の学校教育で、五、六年生や中学生になって書き取りをやらせていますが、これは実に馬鹿馬鹿しい話ですよ。

井深　韓国の金雄鎔という子供ね、あれだって特別のことじゃないんですよね。

石井　そう思います。あれがやはり生後八か月の時から漢字を覚え始めました。たまたま漢字を読むのを発見したというのが……。

井深　きっかけですか。

石井　韓国の将棋の駒には“車”というのがあって、向こうでは“チャ”と発音するんだそうです。雄鎔君がこの駒を持って「チャ、チャ」と言っているのを母親が見て、これは漢字を読んでいるのかも知れないと思い、試みに他の漢字を教えてみた、というのがそのきっかけです。結局、三歳になったころには、どんな本でも、ほとんど読めるようになっていた、ということです。でも、私は、現在のところ、三歳ごろから始めるのがいいんじゃないか、と思っています。

井深　いつ、どういう風に、という点を詰めていくのが、早期教育のなかなか簡単にはいかない問題ですよね。